

イカ、サバ資源動態調査

I 調査目的

本県太平洋岸に來遊する沿岸資源のうち最も重要なスルメイカおよびサバの漁況を把握し、來遊資源量、分布移動・生態について調査研究をおこなう。特にスルメイカについては、漁海況予報事業とをわけて漁業経営の安定に資する。

II 調査内容

1 調査期間 昭和45年7月1日から昭和45年11月20日まで

2 調査場所 本県太平洋沖合

3 調査員および調査船

(1) 調査員 漁業課長 浅加 信雄

技師 赤羽 光秋

技師 十三 邦昭

技師 中田 凱久

技師補 鈴木 史紀

(2) 調査船 試験船 瑞鷗丸および東奥丸

4 調査項目

(1) 海況調査

(2) 漁況調査

(3) 生物調査

(4) 情報収集

5 調査方法

調査員1名が交代で八戸市に駐在し、当業船からのききとり調査および試験船の調査結果、魚市場陸揚調査ならびに魚体調査等をもとにして、漁況概況を作成し、日報として、八戸漁業用海岸局から沖合各船に通報するとともに、市内に設けた掲示板に速報を掲載し、地方紙にも掲載広報した。

また、8月20日から10月20日まで実施した。漁海況情報伝達の迅速化試験事業の業務を担当した。

III 調査結果

1 海況調査

八戸近海のスルメイカ漁場は、津軽暖流域の内部に当る、したがって、対馬暖流の状態が反映すると考えられる。

日本海で実施した定線海洋観測結果から釧路崎西方における対馬暖流の北上流量は第1表のとおりで、5～7月の北上流量は昨44年より著しく少ない。また、本年春の冷水域の接岸が顕著で、かつ、対馬暖流の北上勢力が弱く、水温も低いという異常冷水の様相を呈していた。3月、4月においてこの傾向は著しく、5月以降は表層近くでは回復しなから、下層において低温傾向が7月まで持続した。これら日本海における海況が、太平洋側にどのように反映したかについて、太平洋の定線観測結果から、津軽暖流域の100m層における面積を算出した第2表からみると、津軽暖流域の面積は、5～7月の期間を通じて、昨44年の約7割程度を示し、対馬暖流の北上流量とほぼ同様の結果が示された。

第1表 対馬暖流の北上流量 ((単位 $10^6 \text{m}^3/\text{s} \cdot \text{c}$)

年次 \ 月	5月	6月	7月
S 44年	2.1	2.4	3.0
S 45年	1.4	1.5	2.6

第2表 100m層における津軽暖流域の面積 (単位 666mile^2)

年次 \ 月	5月	6月	7月
S 44年	4.0	4.1	4.4
S 45年	2.9	2.3	3.9

秋の海況について、八戸近海漁場と密接な関連をもつ津軽暖流の動きをみると、津軽暖流の張出し面積は、春とは逆に10月の場合例年よりもやや広く、また、水温は8月以降11月までの期間、春と逆に例年より 2°C 前後高めに推移した。

2 漁況調査

(1) 夏イカ

初漁日は6月28日で例年より遅れた。6月下旬から7月下旬に至るまでの期間、第3表のとおり、各旬とも昨44年の7分の1に及ぼす、その期間を通じて、およそ8%にとどまり、全く異例の不振な状況がつづいた。そこで、7月中旬における近海操業船は僅か50隻程度で、他は、日本海大和堆、武蔵堆、釧路沖で操業した。8月上旬以降、漁況は漸く、やや上向き、8月10日前後と8月30日前後をピークとする漁獲の山がみられた。しかし、この山も1日400トン前後で例年の4分の1程度で、また、山の形成が例年より非常に遅れた。

この山の形成と同時期に、瑞鷗丸が7月下旬に鮫角東方80哩付近で放流したスルメイカが再捕されたこと、および魚群の性状がこの時期を境にして一変したこと等の事実から、8月上旬以降、三陸沖合から接岸したものと考えられる。

以上の漁獲の山は、ほぼ9月上旬に連なったが、9月上旬後半から下旬前半に至るまでの期間は漁切れ状態となり、下旬後半以降再び漁況はやや上向きを見せたが9月末までの夏イカの漁獲量は6,313トンで、不漁であった昨44年の約35%で近年5ヶ年平均の24%にとどまり、大不漁となった。

夏イカの中で、特に7月下旬に至る間において、不漁の程度は著しく、昨年の約8%、過去5ヶ年平均の約5%であった。

8月から9月に至る期間の漁獲量は、昨年の56%、過去5ヶ年平均の44%で、本年の場合8月9月に夏イカの90%を漁獲している。

第3表 旬別および年別スルメイカ漁獲状況 (八戸近海)

月旬 項目	6月 下旬	7月 上	中	下	8月 上	中	下	9月 上	中	下	合 計
45年 隻 数	隻 4	17	311	684	850	572	1,477	982	60	1,106	隻 6,062
45年 漁獲量	トン 0.7	9.6	167.5	479.6	1,121.1	698.2	2,160.0	574.3	38.1	1,063.7	トン 6,313
44年 漁獲量	トン 17.8	979.1	1,126.7	6,450.6	3,539.4	2,695.2	2,410.7	1,013.1	384.3	22.6	トン 18,639

第4表 八戸近海漁場における夏イカの年別、時期別漁獲状況

年 度	項 目	6～7月の漁獲量トン (%)		8～9月の漁獲量トン (%)		夏 イ カ 全 漁 獲 量	
		トン	%	トン	%	トン	%
S 40 年		17.435	66	9.133	34	26.568	100
	41	6.165	25	18.127	75	24.292	100
	42	22.289	64	12.778	36	35.067	100
	43	14.034	48	15.020	52	29.054	100
	44	8.574	46	10.065	54	18.639	100
40～44年平均		13.699	51	13.025	49	26.724	100
S 45 年		658	10	5.655	90	6.313	100

(2) 秋イカ

夏イカ漁期から秋イカ漁期に移行する間に漁切れ期がみとめられるが、最近5ケ年を通じてみた場合、第5表から、例年10月中旬が漁切れ期にあたっているが、本年の10月中旬は平年値230トンであるのに対し、1.060トンに達している。

この時期に瑞鷗丸が沖合において放流したイカが太平洋沿岸および津軽海峡内で再捕されていることから、三陸沖合からの接岸群であろうと推定される。また、例年11月上旬がピークであるのに対し、本年は10月下旬について漁切れ状態をしめしている。そして11月中旬から下旬にかけて漁況がやや好転したが、その後極端に不振となった、秋イカ全体の漁獲量は6.916トンで不漁だった昨年の39%過去5ケ年平均の29%にとどまり、夏イカ同様大不漁に終わった。

第5表 S45年および過去5ケ年の旬別漁獲量 (単位100トン)

月・旬	9 月			10 月		
	上 旬	中	下	上	中	下
S40～44年平均	12.7	16.9	14.2	13.5	2.3	15.1
S 45年	5.7	0.4	10.6	13.3	10.6	1.7

月・旬	11 月			12 月		
	上 旬	中	下	上	中	下
S40～44年平均	67.3	43.9	34.6	23.5	12.5	3.9
S 45年	1.5	12.2	16.9	6.7	0.8	5.0

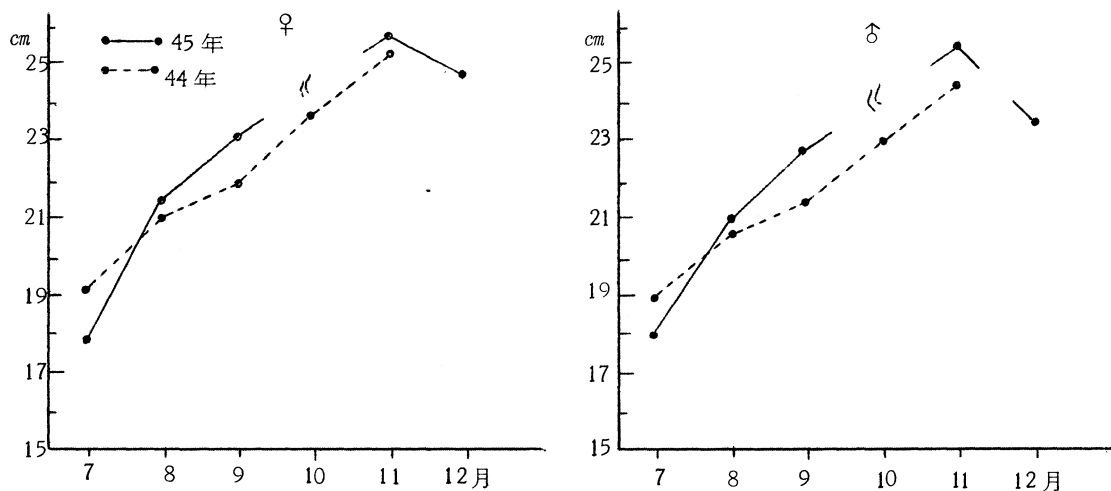
3 生 物 調 査

(1) 体長組成

第1図から44年の外套長と比較すると全体に大型であった。

7月18cm, 8月21cm, 9月22cm, 11月25cm, 12月24cmとなっている。

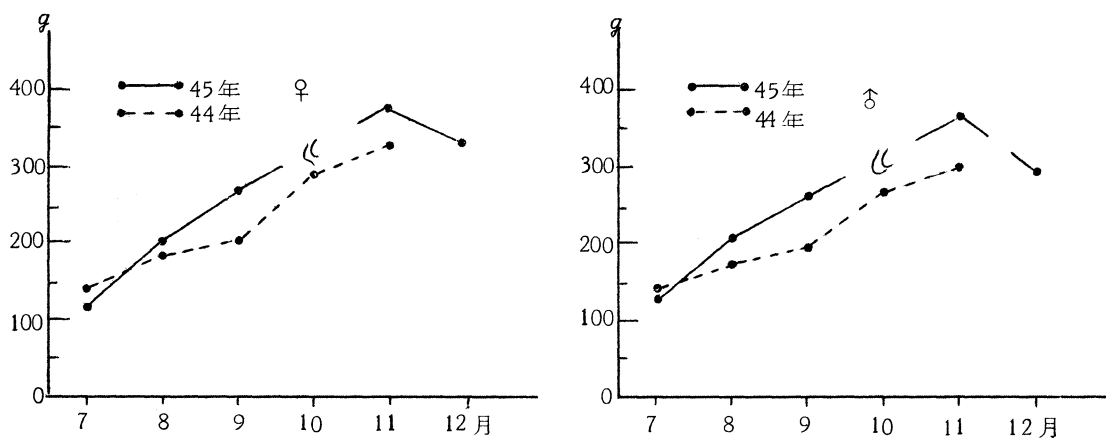
第1図 スルメイカ雌雄別，年別，月別，平均外套長



(2) 体 重

第2図から44年と比較すると全体に大型であった。

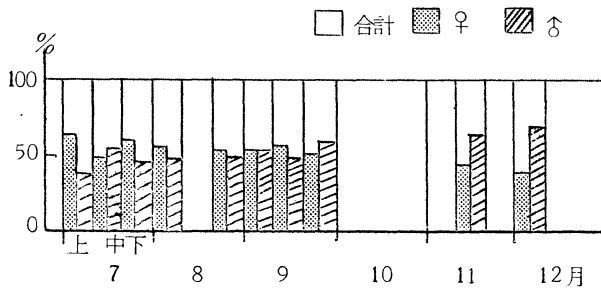
オ2図 スルメイカ雌雄別年別月別平均体重



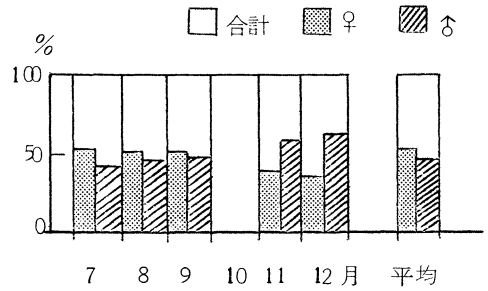
(3) 性 比

図3から9月まで雌の出現率が高く，11月と12月は逆に雄の割合が多い。全調査個体では雌51.9%雄49.1%であった。

第3図 スルメイカ旬別雌雄別出現率



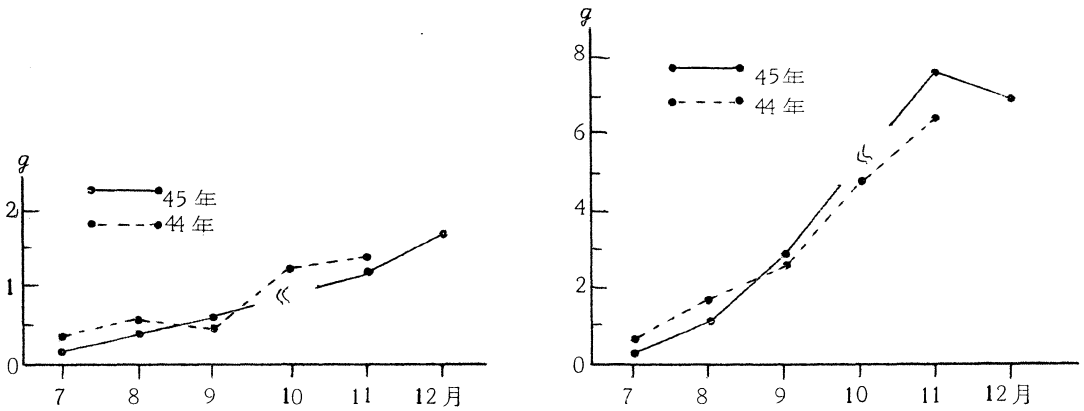
スルメイカ月別雌雄別出現率



(4) 生殖腺重量

図4から、44年と比べると、雌の場合、全期間を通じて昨年より低い値を示したのに対して、雄の場合は、9月以降やゝ大きい値を示している。

第4図 スルメイカ雌雄別・年別・月別・平均生殖腺重量



(5) 情報収集

毎朝入港船から漁況のきゝとりをおこなうとともに、魚市場陸揚調査を実施し、魚体調査等をもとにして、7月1日から11月20日まで漁況日報を作成し、広報した。

IV 調査の成果および今後の課題

1 調査の成果

毎年、漁期中調査員が駐在し、漁況日報を作成し広報してきているが、沖合操業船の無線広報の聴取率が非常に高くなってきている。

2 今後の課題

(1) 問題点

予報の精度を高め、利用度の高い予報作成が必要である。

(2) 今後の課題

現況把握から、資料の蓄積が必要である。